

哲學研究

第三百六號

第二十六卷
第八冊

人間と經濟 (承前)

島 芳 夫

五

人倫の經濟的基體の構造は基體の概念規定に従つてそれ自身道德的形相の否定と肯定の可能性の矛盾を藏するものとして未開的前史的經濟社會の靜止的單純さに於てでなく、文化的歴史的經濟社會の動的對立と複雑の唯中に於て捉へられるべきであり、かくして又道德の歴史の經濟的基體に於ける發展の方向を洞察し得るのである。然しながら又道德の存在の仕方は歴史の基體の主體的形成の方向にあるとすれば、道德的主體は心的物的兩様の意味に於ける質料をそのままに保存する歴史の基體の中に解消するのではなくて、それに新しい主體的價值秩序の形成を加へる行爲に於て成立するものであることは明かであらう。歴史の人間はヘーゲルが考へた如く、個人的目的と世界史の實體的内容との統一であるが、然しこの統一は單なる價值の論理乃至歴史の法則の見えざる手によつて行はれるのでなく、世界に生きる個人の自由と反省を媒介としてのみ道德的歴史的主體性を有し得る。故に深い主體性の自覺の要求から見れ

ば、ホモ・エコノミクスは經濟學者自から認める如く利益獲得の努力と云ふ假説によつて簡單化された對象の人間であり、更に經濟的基體と人間主體の行爲の統一としての本來の經濟的主體が要求される。このやうな主體は一面經濟的相對的自主性をその基體的契機に於て保存しながら、他面この基體の内在的矛盾の解決の要求が必然的に超經濟的人間形成の理念の下に照し出されるところに成立する。今日の經濟哲學の根本問題は經濟的なものを超經濟的なのとの綜合の可能性を考へて見ることにあると云ひ得るであらう。

經濟的基體はそれ自身矛盾的構造を藏するとすれば、屢々主張される如く、——例へばランケ——文明としての經濟の文化と異なる點は前者の直線的進歩の可能性にあると云ふ考へは維持されなくなるであらう。蓋しそれ自身矛盾的否定契機を藏する經濟活動には單なる肯定的進歩は許されぬ筈だからである。經濟にも危機と退歩の可能性があることは他の文化の場合と同じである。景氣と恐慌の波動運動の存在や、生産力の量的進歩に伴ふ質的退化、——モリス、ラスキンによる勞働の藝術化の運動はこゝから生じた——や、總じて共同體から利益社會への一般的圖式の下に擧げられる資本主義的生産の道德的頹廢の存在はこれを裏書きする。然らば經濟的基體の矛盾的構造は何であらうか。我々はそれを使用價值と價値の對立的統一としての財に於て縮圖化されてゐる、經濟の家計と貨殖、乃至 $W \rightarrow G \rightarrow W$ の兩形式の矛盾として示すことが出来る。然しながら他方で、ミスミスが世間大部分の人々はその境遇改善の手段として資産の増殖を欲すると述べてゐる如く、この兩形式の矛盾の根柢には本質的相互補足の關係がある。それは相互補足が内在的矛盾の展開を経てより高い統一の要求を現はして來る關係であり、而してこの徑路は歴史的過程の法則であると共に、人間の主體的基體的全體形成の論理の行爲的展開である。確かに經濟の人間の基體

の發見はロツシヤト、クニス、ゴットウル、ゾンバルト等の歴史學派的乃至社會學的研究の重要な功績とされてよい。然しながら、これらの試みに於て共通に缺けてをり、而も經濟哲學的に見て最も重要な問題を成してゐるものは經濟的行爲を有限の中に永遠を残さうとするポイエーシスとして捉へ、かくの如き行爲の擔手としての經濟主體の構造を露けにする試みである。さて創造的主體の構造は一般に矛盾的統一の形成にあると考へられるであらう。矛盾が無限に深い程創造は無限に深い。それ故經濟主體の構造に於ても、その自然的欲求的基體に於て生活空間と欲求時間との間の緊張、この基體の制作行爲への高まりに於て價值と質料、制作理性と非合理性との間の對立、更に價值の使用價值と價值乃至資本との分裂に對應して均衡から發展への轉化と共に生産主體と生産主體並びに生産社會との間の相尅が互に結合し重疊しながら統一的形成への無限な努力を生み出してゐる。

經濟的生産は物に於ける價值の生産である。經濟的財に於て使用價值と交換價值が統一的に形成され、これが永遠な制作を形作る。然し經濟學の價值論には、一、その價值概念そのものゝ中に、二、價值の秩序の考へ方に、三、價值生産の過程の説明の中に經濟主體の概念の確立を阻む思想の未完成を残してゐる。周知の如く、ポエーム・パウエルクは價值を客觀的價值と主觀的價值に分け、且つ後者を以て一切の經濟價值の究極の規準と考へた。所謂限界效用説はこの主觀的價值論の結果であると共に又その支柱である。然しここで問題になるのは價值の主觀性と客觀性とは何を意味するかと云ふことである。ポエームによれば、主觀的價值とは主體の幸福の目的に對する財の重要性であり、客觀的價值とは何らかの客觀的效果を齎らす爲の財の力、又は能力である。⁽¹⁾然し價值の本質は單に主觀的又は單に客觀的であることに存するのでなく、主觀的にして客觀的、又は主觀と客觀の關係にあるのである。快美善は快

不快の感情に對する表象の三つの異なる關係であり、そこに主觀の目的乃至關心又は少くとも主觀の合目的性の原理が豫想されるとカントも考へてゐる。⁽²⁾所謂超越的價值と云はれるものもそれが物の客觀的性質と異なるのは後者の外への超越に對する前者の内への超越、從つて内の無限な深さからの要求として存在することである。然しこのやうな單に主體的又は主體的に超越的な價值は實は價值體驗の原理ではあるが、未だ具體的價值體驗を形作つてゐない。具體的價值體驗は表象對象の根源的價值原理に對する關係——一致と不一致——を表現してゐる。それではボエームの主觀的價值は單に價值心理主義に過ぎないであらうか。又はマックス・ウェーバーの辯護する如く、それは經濟的行爲の合理主義の一理論として認められるべきものであらうか。沙漠の旅行者がオアシスで見出した少量の水は日常我々が使ふ水よりも主觀的價值乃至限界効用に於て遙かに高いことは疑はれぬ事實であらう。限界効用は財の量の少い程高く豊富な程低い。この意味で價值は我々の貧困の徴候である。⁽³⁾然しこの價值の相對性はそれに全然外的情勢との相應を缺く意味で單に主觀的であるに過ぎぬだらうか。ボエームはさうは考へてゐない。寧ろ限界効用による評價こそ人間の經濟的思量をして誤りならしめるのである。若し人が沙漠の旅行の場合と日常の場合と水の評價を同一にさせたら、彼はこれらの異なる場合に於て有つ水の欲望に對する關係——この一定の主觀・客觀の關係はそれ自身客觀的事實である——を誤認してゐるのであり、その限り彼の行爲は危險か無駄か何れかの錯誤を犯してゐるのである。この意味でウェーバーの云ふ如く、限界効用説は單に價值心理主義でなくて行動合理主義の基礎付けを意圖してゐるのである。⁽⁴⁾

(1) ボエーム・パウエルク經濟的財價值の基礎理論長譯岩波文庫一五頁

- (2) Kant, Kritik der Urteilskraft, § 5.
 (3) Schumpeter, Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung, S. 39.
 (4) M. Weber, Die Grenznutzlehre und das „psychophysische Grundgesetz“. Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, S. 360 ff.

かく主観的價值論は單に價值の主観主義でないとするれば、逆に客観的價值も亦ポエームの考へる如く對象の客観的能力と同一視されてはならぬのである。價值が單に物の「力」乃至「成分」と同一でないことは、物が作り出す客観的効果が人間の幸福の増進と不可分離である場合にのみこの兩者の同一化が起ることを考へて見れば明かであらう。我々は軍事乃至建築目的との關係に於て火藥の爆發力又は材木の耐久力をそれぞれ爆發價值、耐久價值と云ふ言葉で代用させるが、然し火山の爆發價值や細菌の傳染價值と云ふやうな置き換へはやらない。ポエーム自身「人間が得んと欲する外部的効果と同數の多種の價值が存在する」と云つてゐる場合、⁽¹⁾價值は明かに人間の欲求と關係させられてゐる。即ち價值は單に客観的効果を齎らす財の力でなくて、人間が望むやうな客観的効果を齎らす財の力である。然らば最早人間の欲求乃至幸福に全然無關係な客観的價值は存在出來ないのである。

(1) 一六頁

我々はこの價值の客観主義が財の客観的交換價值と云はれるものへ適用されるに及んでその自己矛盾を一層明瞭にして來ることを見るであらう。何故なら、交換價值と云はれる財の力は本來財そのものが持つ力でなくて主観的價值評價の結果、換言すれば商品とその對價財の主観的價值評價の關係に基くと見られてゐるからである。或る財の價格

は唯その現象形態だけを見れば、この財が他の財の一定量と交換される兩者の客觀的量的等價關係を表はすに過ぎないが、然し質はそれらの財が交換する人々にとつて彼等の幸福にどれだけの意味を有つか又は有たぬかと云ふ價值判斷の表現である。或る財の買手がそれを非常に高く評價するのは、ポエームによればこの財に自己の幸福にとつて高い重要性を認める場合と、それ程の重要性を認めないが又その對價財たる貨幣にも僅かの價值しか認めぬ場合の二つがあるが、後者の場合でも幸福に對する重要性が消極的にせよ評價されてゐると云はねばならぬ。何れにしても、交換價值を物の客觀的能力と同一視するのはポエーム自身の交換價值の成立の説明に根本的に矛盾してゐる。

然し人間の價值の創造に唯主觀客觀の關係の如きものは存在しない。そこには人間の經濟的活動を支へるもつと具體的な生活基體の構造がある。ポエームの價值論からでも明かな如く、從來の經濟學者によつて構想されたホモ・エコノミクスは衣食住に最大の限界效用を認める價值秩序の上で、量的價值計算を自己の利益獲得の爲に行ふ利己的人間であつた。ここには明かに經濟の創造的性格の理解を阻む三つの獨斷がある。第一、價值秩序の衣食住への偏倚、第二、價值の量化、第三、社會性の否定である。古典經濟學に於て經濟の目的は物質的富の獲得にあるとされた。物質的富は精神的富に對立するが、同時に物質的と云ふ極めて常識的な言葉の使用法から云つて藝術や學問の如き高次の文化財はそれから除外される。それ故等しく財でありながら人間の官能的欲望充足の爲の手段として（使用價值だけでなく交換價值の擔手としても）物質性を本質的に有つと云ふ意味で特に物質的富と云はれるのである。經濟を單にこのやうな富の獲得に限定すれば、ミスヤミルに於けるやうな生産的勞働と不生産的勞働の區別が考へられるのは必然である。この區別によれば、物質的富を直接乃至間接に生産しない勞働は總て不生産的である。ミルが溺死し

かかつてゐる人間を救ふ行爲は若しその人間が生産的労働者でなければ生産的でないとか、宗教的救済行爲は不生産的であるとか云つてゐるのはこの經濟の唯物論的徹底の愚劣な結論である。⁽¹⁾然しスミスの直接的生産性を間接的生産性にまで讓歩すれば、生産的不生産的の區別は最早悟性的分別でなくて歴史的裁斷による外に道はない。かくて靈の救済を目的にした基督教から近代資本主義的精神を成す労働の尊重と合理主義的生活様式とが生れ、それ自體不生産的な戦争が却て經濟組織の發展を促す(日清日露の戦役による日本資本主義の發展)ことになる。リストの國民的生産力の歴史的綜合的考察はまさにこれである。然し次にこの經濟の唯物論は經濟の文化的力を不當に過少評價してゐる。成程經濟的生産性と文化的生産性とは同一ではない。否矛盾さへもする。然し兩者の關係は正しくは形相と基體の關係の如く本來矛盾の統一にあるのである。經濟的生産は單に精神的生産と異りそれを頽廢させるだけでなく、寧ろそれを支持し強化する可能性を藏する。總ての財は使用價值と交換價值とを有つことによつて經濟的財に轉じ得るが、これは兩者の端の同一化によつて文化の功利主義化を齎す危険を藏すると共に、兩者の對立に於ての統一によつて反對に文化の經濟的被制約性の深い意味が露はになる。人間の精神の文化的形成は物の技術的經濟的生産なくして絶對に不可能なことは固より、貨幣の文化的機能も亦輕視されてはならない。羅馬では報償的労働と無報償的労働の區別は肉體的労働と精神的労働の區別に外ならなかつた。藝術や學問は *ars liberalis* であり、本來労働 *labor* でなくて自己目的的な *studium* であつた。⁽²⁾これは確かに精神的創造の超物質的高貴な *honor* を示してゐるが、然しこれは又氣分的主觀的好意から出る爲に對等の且客觀的交渉關係を不可能にさせるだけでなく、文化を少數の資産家の獨占物にさせる恐れがある。貨幣は全く何物をも豫想しない平等的普遍的流通手段である爲に、同時にあ

らゆる人間の價値を平等且普遍的に世界に流通させる。文化財の市場價格的變動は交換の場としての市場の貨殖的無原理に基き、そこに文化意識による價格形成の合理的規制が要求されて來るが、然しこれは交換の正義のより高い文化社會的原理——我々はそれをアリストテレスにならつて配分の正義と名附けよう——による規制の必要であつて、交換乃至報償の人間存在の根據は失はれぬであらう。

- (1) Mill, *Principles of political econ.* n.y. p. 49.
- (2) Jh ring, *Der Zweck im Recht*, I. S. 83.

このことは然し又文化哲學的價値論に於ての經濟的價論に對する不當な輕視とよい對照を成してゐる。だがこの上からの價値論と下からの價値論との理論的相對は實は人間の日常的家計に於ける理想と現實との矛盾として現はれて來る點に一層痛切な倫理的意味を有するのである。我々の家計の配分に於て如何に衣食住的要求が文化的の要求を犠牲にしてゐるかを考へるなら、これは唯價値哲學的問題として濟まされぬことである。それは兩價値體系の矛盾が意識される限り、單に理論的問題でなくて人間の矛盾的形成としての實踐の問題である。この場合に生の精神への單なる自己犠牲、絶對自己否定は宗教的意味の死即生が語られ得るにしても、それは極めて高貴然し地上生活の否定を伴はなくて一般化され得ぬ特殊な場合を成してゐる。一般の價値秩序としては生の家計は單なる契機でなくて基礎の意味を保ちながら、同時にこれを精神的形成の基礎に、云はば主體的基礎に轉ぜられるべき要求を有つてゐる。基礎が主體化されるだけでなく、主體が基礎化されるのである。經濟は人間の生命意志を根柢にし自然と物に於ける人間生活でありながら、それ自身人倫的傾向を擔ひ又人倫によつて逆に擔はれてゐる。リストは自由は國民的生産力發

展の根本條件であると云ひ、海運に於ては活力、個人的勇氣、企業精神、忍耐が最も要求されるがこれらの性質は自由の零圍氣内でのみ榮え得ると云つてゐるが、然し國民的生産力の人倫的基體は單に自由だけに止まる理由はなく、共同的家計の爲の犠牲、勇氣、協同的訓練、勞苦を勞はる愛情等の諸徳がそれである。如何に未開の經濟社會でもこのやうな生の中にあつて生を越える精神の高貴さの故に我々を感動させるのである。經濟は單に自然でもないことはこれで明白であらう。經濟的基體は精神を生むと共に精神に支へられる意味で精神的基體である。基體は「美しいものへの衝動」を本質上含む筈であつた。

(1) List, Das nationale System der politischen Oekonomie, S. 95.

六

經濟的價值生産の過程は價值が使用價值か交換價值か何れかによつて同一ではない。然し經濟學に於て價值が本來交換價值を意味してゐたこと、従つて價值論は直ちに交換價值論乃至價格論であつたと云ふことは、リストの批評にもあるやうに英吉利經濟學が本來生産力の科學でなくて價值の科學、従つて又交換價值の科學であることに偏してゐた事情によるものであらう。無論近代經濟學の貨殖術的性格は近代經濟社會の貨殖的性格に基くのであり、この歴史的事情を無視して價值概念の抹殺を試みるのは——例へばゴットウルの如く——徒らな觀念的言語的否定に過ぎない。然し我々は今一應傳統的價值論の立場に身を置いてそれが含む歴史の意味と矛盾とを見窮めることから始めよう。

交換價值の存在は交換の存在を豫想するが、交換の存在の存在論的倫理學的必然性——ジムメルやイエーリングが

明かにした如く——は今ここで論ぜられる順序ではない。然し交換價値の存在する理由は交換の媒介者であることに存在し、而してこの媒介は質的相違を量的相違に還元すると同時に、交換されるものの間に量的均等を作り出すことにある。無論所謂交換の正義は單に量的均等でなくて質的に異なる人々の勞働の量的均等、従つてそれは單に均等でなくて比例的均等である。醫者と醫者の間には交換は起らず、醫者と建築家乃至建築家と靴屋の間になるのである。この場合比例的均等はアリストテレスの例を用ふれば、建築家の靴屋に對する比は靴屋の建築家に對する比に等し、或は若し家が靴の百倍の價値があるとすれば靴屋は百の靴を、建築家は一軒の家を提供すると云ふ形で實現される。又は商品Aの價値は質的には商品Bが商品Aと直接に交換される可能性により、量的には商品Bの一定量が商品Aの與へられた量と交換される可能性によつて示される。交換の祕密は質的に比較され得ぬものを量的に比較され得るものに變化させることである。この變化は本來不可能なものをノモスの力で可能にさせる點で確かに不自然さを有するが——ミケランジェロの作品が一本の鉛筆と量的に比較され得るようになせるのが交換である——而も又そこに經濟的理性の必然的要求が、更に大きく云へば存在一般の質的量的構造が見られるのである。ジムメルの云ふ如く交換は主觀の欲望を對象と對象の交換關係に媒介させることにより價値の超越性の契機を孕んでゐるが、この價値の超越性は質の量化に基いてゐる爲に他の價値領域に於てよりも一層強い自己疎外的傾向を含んでゐる。即ち經濟的生産物は單に生産されたことに内在する自己疎外性だけでなく、それが量的に他物と比較均等化されることによる自己疎外性を含む。ベルグソンに於て明かなやうに、純粹に質的なものが量化されると云ふことはそれが空閒化され、物質化されることである。人間は人口の一單位として計算される如く、生産物は社會的總生産物の一定額として交換される。社會

化は比較により、外延化は量化によつて行はれる。然し量化は本来質の否定でなくて、寧ろ交換の要求から云へば質的相違の上に立つ量的比較である。質の規定に量の規定が加はるのである。而もこの兩規定は唯外面的に一つの財に於て並存してゐるのでなく、相互的反撥に於ける相互的要請の關係に立つてゐる。この點で勞働價值説は價值のこの二重關係を見逃してゐると云はねばならぬ。マルクスの説明によれば、商品の價值は使用價值の生産の爲の有用且つ相異なる具體的勞働から抽象された普遍的人間勞働、又は平均的社會的に必要な勞働時間に於て生産する平均的社會的勞働力を實體とする。例へば、英吉利に於て蒸氣織機の採用後は一定の絲を織物に變化させる爲には以前の半分の勞働で充分であるとすれば、これがその時の平均的正常的生産條件と勞働の熟練と強度の社會的平均程度に於ての社會的勞働時間である。故に若しこの國の手織工がこの爲に以前と同じ勞働時間を費すとしても彼の個人的勞働時間の生産物は今は半分の社會的勞働時間しか現はさないから、以前の價值の半分に落ちるのである。

- (1) Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, 1133 b.
- (2) Simmel, *Philosophie des Geldes*, S. 30.
- (3) Marx, *Das Kapital*, I. S. 5.

然し財の價值が單なる抽象的無差別的勞働時間によつて規定され難いことは同じ一時間の勞働がその勞働の種類や熟練の程度によつてその價值が異なることから推測され得よう。等しく勞働價值説の立場に立ちながら、マルクスの如く量的機械的普遍主義に偏しないで勞働の量化を制限する種々なる質的相違の存在を認めたスミスは我々により多くの教へるものを有つてあらう。彼によれば、勞賃は、一、職業其物の快不快、二、職業學習の難易とその經費の多少、三、

職業に於ける使用の安定不安定、四、職業執行の當事者に與へられるべき信用の大小、五、職業に於ける成功の望の有無多少によつて平等ではない。例へば、總ての職業中最も不快な死刑執行吏の職はその仕事の量に比して報酬は大であり、危険にして不潔な炭坑夫の八時間の勞賃は鍛冶職人の十二時間の勞賃よりも大である。⁽¹⁾これは勞働の生産力は單なる量的原子論的勞働から成立するのでなく、量的價值へ還元される場合でも心理的社會的技術的生産力として人間勞働は根柢になほ保たれてゐることを意味する。否それ所でない、勞働の倫理は人間を唯交換される生産力として考へるだけでは未だ成立しない。交換の根柢にはそれ自身は絶対に量化されずして而も交換の正義を經濟的のみならず倫理的に成立させる、國民として官能的精神的に生きるべき人間の品位が要請される。このやうな國民的人間の品位は固より超經濟的人倫的要請であるが、然しこの要請が交換に於て如何に量的に實現されるかと云ふ問題は重要な經濟倫理の問題である。而して經濟の根柢にひそむ人間の倫理的要求を無視しては經濟そのものが成立しない。

(I) Smith, *Wealth of nations*, I. p. 89 sqq.

價格の形成は需要と供給の均衡への傾向によつて決定されると云はれる。然しこの決定の可能性は需要と供給の價值關係が量化されることを前提にする。交換の媒介者である貨幣は *Gelten* (*Geld*, *Geld*) を意味し、ゲルテンは價值の均等を表示するから、それは本來 *Vorgelien*, *Entgelien* に外ならぬ。⁽²⁾このやうな貨幣によつて表示される報償の關係はその原理的意味から云つて人間關係を理性的に規制する最も大いなる原理の一つ、即ち均等のロゴスに基づくのである。それは復讐の要求から始まつて人倫的正義を経て宗教的正義にまで至る極めて多様な存在形態を有つロゴスである。ゲルテンは歴史的には異教の神への奉仕に關係する言葉であり、人は感謝の犠牲を以て彼に與へられた幸福

を神に (Falkon (Vergeltung) して、贖罪の犠牲を以て彼が犯した罪を Gallon した。⁽²⁾ このやうな ロゴスの性格の故に貨幣はアリストテレスによつて το μέτρον と云はれた。一切の生産物の價値を比較計量し得るものはそれ自身價値でありながら、比較される價値の何れにも偏しない、従つて實質的價値の何れでもない空無の故に却てその何れをも比較し得る媒介的機能を有する。この意味で交換手段が個別的財から貨幣へ更に實體貨幣から機能貨幣へ、とその形式化の段階を進めてゆくのは交換のロゴスの必然的要求である。さて價値の比較は量的に行はれるが、然しそれは質的なものの量的比較である。故に使用價値から全然抽象された交換價値は存在出来ない。普遍的購買力たる貨幣はその非人格的普遍性の故に却て個人的交換價値の多様性を抱擁出来る。貨幣は様々の主觀的價値と使ひ道とを有する。聖書の一ミナの使ひ方に關する比喩的物語りにもある如く、金の使ひ方程人間の値打をよく示す尺度はない。而して貨幣の個人的交換價値は各個人がそれによつて事實上獲得してゐる使用價値によつて評價される。然し社會問題としての經濟の矛盾は價値の量と質との相互媒介に、又は量の優劣關係に基く質の矛盾的鬭争關係にある。ボエームの例をとれば、富豪がさまで必要でない十三頭目の馬を買ふ場合と百姓が土地の耕作上是非必要な一頭の馬を求める場合とを比較して見る。ここで明白なことは兩者の貨幣の利用の仕方の對立的なことであるが、これは然し貨幣の量と使用價値の質の二方面から規定されてゐる。富豪にとつては貨幣は量の大さから貧しい百姓に比較して限界效用は極めて僅かの價値しか有たず、又兩者の馬に對する欲求は質的に異なるが、若し前者がこの一頭の馬をより高い附値で獲得するとすれば、この經濟行爲の社會的害悪は量的に見れば貨幣の主觀的價値の低さによる、より高い價格で他人のより大なる利益を犠牲にしてより少い自己の利益を得ようとする矛盾と、質的に見れば自己の第二次的使用價値の爲に他

人のより重要な使用價值を犠牲にすると云ふ矛盾に還元される。

(1) Jherings, n. a. O. S. 89.

(2) Jherings, n. a. O.

かく經濟的價值は本來質的量的兩規定を含む故、この價值の量的規定従つて又所謂價值論を否認して、これを質的價值乃至需要の秩序によつて置き換へようとする *Welfare* の經濟學乃至生の經濟學は必然的にこの價值の本質並びにそれを生産する歴史的經濟構造に目をつぶることになるであらう。然しながら我々は又何故にかくの如き理想主義的反動が生ずるかの理由をも省みねばならぬ。確かに經濟的價值の量的性格はその根本性と徹底性に於てこの價值に特有なものである。この場合經濟的價值の量的性格とは單に使用價值に對する交換價值に限られずしてこの兩價值全體の量的還元を云ふのである。ボエームは「快不快の大小決定こそは財に對する我々の態度、殊に財の我々の幸福に對する重要性の大小に關する知的判斷、従つて價值評價と、我々の實際的經濟行爲とに關する根據を構成する」と云つてゐる程、財の價值の量化は經濟行爲の根本的要請なのである。無論他面近代の快樂主義に對する批判に於て既に指摘された如く、價值と快不快との同一視、或は快不快の量化の可能性に對する素朴な信仰はここでも批判されねばならぬ。これはカントの快不快の感情に對する考へ方でもさうであるが、快不快を對象への關係から抽象すればそこには唯程度の相違しか起らないであらう。だがそれにも拘らず、質的に異なる價值感情を量的に比較すると云ふことは人間の選擇的欲求の根本條件少くともその半面を成してをる。我々は質的に異なる欲求對象の間を選ぶだけでなく、量的に異なる欲求對象を選擇する。我々の對象の選擇は價值感情が對象の性質に對する感受性と結合してゐる限り質的

であると同時に、感情の強さ大きさの程度に規定される限り量的である。快不快の感情は質的對立を含むと同時に様々の程度を含んでゐる。否リップスによれば、強度、大きさ、深さの如き量感情と云はれるものでもそれ自身は感情の性質と見做され得るのである。我々は情意に於ける質と量の深い相互滲透を見ねばならぬ。人間は決してカントの考へるように、感情の對象がどれだけ多くの且つどれだけ大きな満足をも長く自分に與へるかを問ふのみではない。ポエムは一人の少年が若干の錢で一個の林檎を買ふか、それとも六個の杏を買ふかを意志決定する場合に、唯一般的に林檎の方が杏よりも甘いか如何かを判断するだけでは不充分で、一個の林檎の與へる快樂が一個の杏の與へる快樂の六倍よりも大であるか小であるかを判断せねばならぬと云ふが、かくの如き數學的意味の量的判断は經濟的價值判断がその合理的貫徹に於て要請する理想型に過ぎないので現實の事態では全然ない。ポエムは經濟的價值比較をその數學的計算の不精密さの故に嚴密には「測定」ではなくて「評價」と云ふべきであると云ふが、實際何倍の價值乃至何分の一の價值の如き數理的計算は價值感情の非空間的性質上絕對に不可能である。例へば、一個の林檎よりも六個の杏により多くの快樂を想像することは出来るが、一個の杏の快の量を規定してそれを六倍すると云ふ如き手續きは絕對に不可能である。經濟的價值比較に於て數理的計算が行はれるのは價值體驗の外面的空間的面、即ち財に對してであつて、價值體驗そのものに對してではない。價值の心理的內面的面に對しては價值比較は數理的計算的ではなくて情緒的的心理的に行はれる。

(1) Lipps, *Ästhetik*, I, S. 505 ff.

(2) 八五頁

このやうに經濟的價値はその主觀的非空間的面に於ては絶對に數學的計算の對象にはなり得ず、若しなり得るとすればそれは交換價値を媒介とするか、それとも價値體驗の空間化的説明手段として利用されてゐるに過ぎない。故に財價値とその數理的表現との間には不充全性の餘地が必ず残つてゐる。經濟的價値の矛盾はその質と量、又は使用價値と交換價値とが相互依存的關係を保ち、共に人間の必然的欲求の對象を成してをりながら、その兩者の對應は本質的に不充全であることに存する。貨幣の價値評價はノモ斯的約束的人爲的である。然るに貨幣經濟的文化の特色はこの兩價値の間の對應の本質的不充全を充全な同一性に歪曲させるのである。單に財の質が完全に量的に評價され得ると信ぜられてゐるだけでなく、所謂人格價値と市場價値とが同一視されるようになる。貨幣經濟の市場では、例へば充分な時間働き得る勞働者は *full times* の、十三才以下の六時間しか働き得ぬ子供は *half times* で表示される。換言すれば、資本家が人格化された資本である如く、勞働者は人格化された勞働時間以上の存在として取扱はれない。かくの如き生と精神の價値の貨幣的量的評價への隸屬はまさに人間の價値秩序の顛倒を意味するが、このやうな文化の危機は實は經濟的價値そのものの矛盾的構造の歴史的顯現に外ならない。現にジムメルによれば、人格價値の貨幣化は資本主義社會以前に種々な形の罰金と購買結婚の如き古代的中世的風習の中に現はれてゐる。⁽¹⁾如何なる種類であれ、經濟的價値の量化の象徴としての貨幣が存在する社會では人間價値の量化の傾向が多少にせよ含まれてゐる。

(1) Simmel, a. a. O. S. 387 ff.

經濟的價値の量化の反面はアトミズムである。價値の量化とそのアトミズムとは必然的に相互に要請し合ふ。蓋し量化は量的無差別的單位への分解を要求し、アトミズムは又アトムの質から量への還元を意味するからである。而し

て價值のアトミズム又は利己主義は一部の歴史學派を除き、スミス以來の近代經濟學の根本傾向であると云ひ得る。無論經濟そのものには家計的共同體の性格が内在してゐるが、然し私有財産制度の發生に基く交換經濟の發展は必然的に他の半面たる貨殖的利益社會的傾向を支配的にさせる。貨幣の普遍主義はその反傳統的ノモスの作爲的性格の故に個人主義を必然の半面とする。世界貨幣にまで發展し得る貨幣の普遍主義は國家貨幣としては國家統一の不可缺的條件であるが、然しその普遍主義は上述の合理主義の性格から同時に個人主義である。確かに交換の發展は人々を他人の氣分的親切に頼る乞食の狀態から解放し、利己主義を唯一の恒常的動機とする自由人同志の取引の場を作り出した。若し交換に好意が必要であるとすれば、それは何人にも示され得る自由な合理的好意、カントの *pathologische Liebe* ではなくて *praktische Liebe* であり、深いが然し個人的なパトスの愛情と交換とは絶對に兩立しない（所謂闇取引やそれに似た不公正な取引は交換とパトスの親切の結合から生れた醜い畸型兒である）。然し交換の自由は獨占の害惡を攻撃するスミスによつて如何に「結合と友情の紐帶」として讚美されても、その現實的經濟的構造は合理的利己主義を根柢にしてゐることに變りはない。合理的利己主義は蜂蜜を略奪する爲に蜂の巢を破壊する熊の利己主義でなくて、蜂蜜をより多く得る爲にこれを保護する琴蜂家の利己主義である。近代の價值論のアトミズムは近代の經濟社會のアトミズムの理論的反映なる點で眞理を開違へて傳へてはゐない。それにも拘らず、それは近代經濟の構造を矛盾的歴史的全體として把へずに唯その根本傾向の抽象的理想型的固定に自足し、眞理は常に全體であることを忘れ去つたと云へるのである。

ボエームによれば、單に使用價值だけでなく交換價值も價値として存在し得る。主觀的價値としての交換價值は財

が他の財と交換される能力によつて得られるある個人の幸福の重要性である。⁽¹⁾従つて主觀的交換價值は結局主觀的使用價值に歸着する。然し嚴密に云へば、主觀的交換價值は單にそれによつて獲得される使用價值だけでなく、交換價值として有ち得る主觀性、換言すれば使用價值を獲得し得る支配力としての價值でなければならぬ。だが何れにしても、價值の主觀性とはその個人性に外ならぬから、交換の場を支配する最も重要な心理的力は「自己の爲に最大の直接的利益を得ようとする」欲求である。客觀的數學的に見れば、交換は少くともその正しい形に於ては犠牲と利益の均等な相互關係でなければならぬが、主觀的心理的に見ればかくの如き均等に於ては交換は起らない。交換が成立する第一條件は各自質的に異なる財の私有であるが、その場合經濟的意味の交換が起るのは財とその對價財とに異なる評價、特に反對の評價を下す人々が相會する時だけである。換言すれば、買手は商品を對價財よりも高く評價し、賣手は低く評價するのである。これに反して彼等の價值評價が一致すれば、兩者の間の交換は經濟的には全然不可能となる。交換の利己主義は、一、大體に於て交換によつて利益が興へられる時にもみ交換し、二、小なる利益よりも大なる利益が興へられるものと交換し、三、全然交換しないよりは寧ろ小なる利益でもあれば交換すると云ふ三法則に従ふ。⁽²⁾例へば、農夫Aが必要上から求めらるべき馬の價值を三〇〇フロリンに評價し、Bはその所有する馬を同様に三〇〇フロリンに評價すれば、彼等の間には交換は起らない。然し若しBがその所有馬を一〇〇フロリンに低く評價すれば、交換は可能である。蓋しこの場合には各自はそれぞれ或る利益を獲得出来るからである。例へば、若し彼等が二〇〇フロリンと馬とを交換することに同意し合ふとすれば、彼等は共に賣買によつて一〇〇フロリンの利得をすることになる。⁽³⁾この場合に交換される財の比例的均等を要求する報償の正義は全く否認されることになるの

であらうか。この要求に従へば、前述の交換では一〇〇フロリーンの馬に對しては一〇〇フロリーンの貨幣が、或は三〇〇フロリーンの貨幣に對しては三〇〇フロリーンの馬が與へられねばならぬ。然るにA B 兩人の評價が一致しない故、このやうな均等價値の交換は全く不可能である。故に若し尙そこに均等の要求が實現される餘地があるとすれば、それは最高三〇〇フロリーンの最低一〇〇フロリーンの間の交換に於て極めて不精密な仕方でのみ存在し得る。即ち三〇〇フロリーンの以上の價値及び一〇〇フロリーンの以上の價値は正しい評價から外れた不均等として成立出來ないが、この範圍では如何なる不均等な價格の存在も許される。換言すれば、價値の均等は幅を有ち、この幅に於ける不均等な動搖を含む。これは交換は單に倫理的な要求でなくて人間の要求であり、正義は人間の利己主義の否認でなくてその合理的實現であることに基く。シュンペーターの云ふ如く、利益は不完全性の徴候であると云へようが、不全なる現實的經濟社會に於ける交換はその正義の實現に於ても何時も不完全を免れない。靜的均衡に於ては價格は自由競争の結果生産費と等しくなる。所謂「利益も得なければ損失もしない事業家」の状態が達せられる。費用は生産の犠牲である。總て犠牲なくしては創造は行はれぬ。欲望の間の選擇と犠牲と禁欲的闘争とはあらゆる生産と等しく經濟的生産の内在的否定性を形作る。さて自由競争に於ける市場價格は費用と均衡せんとする傾向、換言すれば利潤消滅への傾向を含むが、然しこの傾向の實現は生産の停止を意味するから、現實に生産が行はれてゐる限りはこの傾向の完全な實現は阻まれてゐると云はねばならぬ。現實の交換原理は報償の正義でなくてより多くの利得への意志とその不完全性の徴候とする正義である。否不完全性と云ふことは靜的均衡を理想としてのみ云ひ得られることで、經濟的發展の指導者たる企業家の標語は *plus ultra* である。⁽⁴⁾ 剩餘價値乃至企業家の利潤は凡そ經濟的發展の可能な社

會に於ては、それが如何なる組織であれ存在する。唯その分配の仕方が異なるだけである。⁽⁵⁾資本主義的社會に於ては、剩餘價値は勞働の生産價値の不當な引下げによつて獲得される。需要供給の純粹な自由競争はそれ自身純粹經濟的抽象であり、現實の市場價格の成立には資本力を根柢とする利己主義が一方的に支配する。ここではポエームが不可能とした價値以下の交換が強要されてゐるのである。

- (1) 一五九—一六〇頁
- (2) 一五〇頁
- (3) 一三七頁
- (4) Schumpeter, *u. a. O.*, S. 137.
- (5) Schumpeter, *u. a. O.*, S. 225.

七

歴史的經濟社會、わけても資本主義的社會が利己主義的交換と生産とを基調とすることは固より絶對に否認され難い現實である。交換の利己主義は先づ自己の財を低く、相手の財を高く評價すると同時に、買ふ者は實際の價格をそれより小に、賣る者はそれより大に掛引きしてその差額を利得せんとする競争の中に、次に多人數の交換者の競争に於ては自己の大なる交換力を利用して仲間を市場の落伍者たらしめつつ、而も相手からは出来るだけ利益を得る爲により小なる交換能力者の協定に追隨しようとする打算の中に現はれてゐる。このやうな利己的市場機構は嘗てはその多數の利己的行爲の無意識的均衡によつて個人並びに社會全體に最大の交換利得を齎すと信ぜられてゐた。然しポエ

「ム自身は明白に斷言する、かくの如き利益は寧ろ見せ掛けであり、「利己的競争は社會的害悪を齎す」。それは彼によれば、貨幣の最大量と主觀的價値の最大量との混同である。單なる經濟的價値の量とその人間の重要性とを區別するボエームの主觀主義は茲では明かに利己主義的經濟學の內在的矛盾を成すのである。」⁽¹⁾

- (1) 一九二頁「アイルランドである飢饉の年に、食糧たるパンの原料の穀物や小麦が確かにその大部分を贅澤な欲望、即ち上等のパンの製造やウイスキーの醸造等に供する爲に多量に輸出されたが、その反面に於て金持の競争によつて騰貴した市場價格を調達し得ない貧しい内地人は不作な馬鈴薯を辛うじて食ふやうな始末で、多數の者は飢へに斃れた事實があつた。」(一九三頁註) 疑ひもなく、この場合に交換價値は極めて高い。然し財の國民的重要性は犠牲にされてゐる。故に利己的交換に於ては個人のより大なる利得即ち國民のより大なる welfare とは云ひ難い。

然し現實の交換經濟が利己主義の上に築かれてゐると云ふ主張は精密な検討に堪へ得るであらうか。第一利己主義と云ふ概念が曖昧に使はれてゐる。如何に交換主體が自己の利益の合理的追求を唯一の目的とするにしても、その主體は孤立的個人ではなく、寧ろ家族や國家の一員としての個人である。無論個人は本來矛盾的存在であり、自己の社會性を裏切る利己主義者として行動する場合が多いが、然し既にその社會的存在性が認められる以上、個人主義としての利己主義の假説は最早支持されない。「國家の手數料でさへも、大なる勞務を小なる勞務よりも大なる代物辨濟と認め」、「消費組合でさへ、良質のコーヒーを悪質のものよりも高く賣る」行爲は個人の利己主義でなくて、團體の利己主義である。従つて、この團體に所屬し、その利益の爲に交換する個人は利己主義者でなくて利他主義者である。即ち交換の利己主義は孤立的個人存在を要請するのでも、又利他主義の可能性を否認するのでもない甚だ曖昧な假説である。

第二に、交換は個人であれ團體であれ唯利己主義的動機を唯一のものとするか、それとも他の動機が存在するにしろそれもそれは理想型的構成に於て捨象されてよい程の非本質的力を有するに過ぎぬであらうか。確かに交換に於ては交換者はそれぞれ自己の利得、より多くの價値の獲得を目差すであらう。然しそれは決して相手の利益乃至報酬の不合理な犠牲を條件とするのではない。「凡そ回易の事は有無を通じて以て人と己とを利するなり。人を損し己を益するに非ず」と云ふ交換の倫理は利己主義の成立の根據は却て利他主義であることを證してゐる。無論又反對に利他主義の成立の根據は利己主義であると云ひ得るのであり、要するにヘーゲルが試みた如く、市民社會の構造と雖も主觀的意志と普遍的意志の相互媒介的統一の形成として考へらるべきであり、單に多數の利己的行爲の外面的均衡ではない。ミスと雖も決して自由競争を總ての人に有利であるとは考へなかつた。實際同業者並びに勞資間の間の自由競争は野蠻な優勝劣敗の法則に支配される。然し同じ自由競争はよい取引によつて市場の購買者に有利に働く。自由競争は善い商品を大量且つ廉價に賣ることによつて大衆の幸福に貢獻する。金持の製造業者は貧しい職人を廉價によつて落伍させるが、この利己的行爲は大衆に對しては利他的に作用する。⁽¹⁾これは決して「見えざる手」の導きではない。交換者自からは利他的動機——それは飽く迄打算的合理的利他心であるが——なくしては彼の利己的動機も満たされぬことを自覺してゐるのである。資本主義的經濟人を全くの利己主義者と見做すのは歴史的事實としての組織と人間に對する無理解と云はねばならぬ。マーシャルの云ふ如く、現代の交換の方法は信頼と正直とを何れの時代よりも要求してをり、現代に比して原始時代では思慮的利己心は少かつたが、又同時に思慮的利他心も少いと云ふことが出来る。現代の經濟の特色は利己主義利他主義の何れでもなくて、思慮的なることである。⁽²⁾

(1) Smith, op. cit., p. 437.

(2) Marshall, Principles of economics, p. 6.

最後に價値のアトミズムは全體的價値を個別的價値の單なる集合と考へる。確かに例へば五袋の小麥は、一袋の五倍所か、十倍にも評價される。即ち五袋全體的價値は最後の最小の要素の五倍 5×1 でなくて、それぞれ價値に於て不
等な要素の總計 $5+4+3+2+1$ である。然しこの考へ方を國民經濟に應用すれば、國民的全體價値は個人の相異なる
限界效用の單なる總計に過ぎぬことになるであらう。然し國民的富は國民的要求と評價の對象であり、單に個人的富
の總計ではない。國民的富は國家の經濟的・政治的・文化的欲求の對象として新しい超個人的價値規定を有つのである。
而して又、この國民的價値評價は逆に個人の價値評價を規定し、制限する。例へば米が、全體として不足し、而も個人
的消費に於てはその不足が直接的にそれ程意識されぬ場合、國家經濟はその米に對する限界效用的評價の高まりを個
人經濟にも要求し、後者に於ける限界效用の低下を制限する。國民資源愛護の要求はここから生れた。限界效用説の
誤謬はその假説とするアトミズム乃至主觀主義である。經濟的價値の人間の評價は確かにその主觀性の深化の方向に
於てのみ捉へられる。然し經濟的主觀は從來の價値論では唯量的アトム的のみ理解され、質的社會的に理解されて
ゐない。⁽¹⁾ 主觀的價値評價は我の主觀性から我々の主觀性へ、利己的價値評價から社會的價値同感へ擴張されることに
よつて、市場の需要供給の國民經濟に對する有害な變動は是正され得るであらう。

(1) シュンペーターによれば、社會的價値に就て語ることは出来ないが、個人的價値の社會的體系としての社會的價値體系は存在
し得る。價格は財の社會的價値評價の一種ではなくて、多くの個人的評價の壓力の下に働く過程の結果である (Schumpeter,

R. R. O. S. 73)。ここにも價値のフトミズムの一典型がある。然し計畫經濟の進行は社會的價値評價に基く價格形成を可能ならしめてゐる。

マーシャルの云ふ如く、近代經濟の特色は單に自由競争によつて定まるのではなく、自由な選擇に基く協同をその半面とするならば、かくの如き經濟的協同のより高い形成こそ現代の歴史の課題である。總ての生産を擔ふ根本的生產力は勞働と土地であり、而して後者二つの價値は有用な社會的總生産物に對する限界生産力、乃至最終の生産的貢獻によつて定まるとすれば、そこには最早利己主義では理解され得ぬ生産の國民經濟的意味が認められる。(未完)